

日本藻類学会 60 周年に寄せて：若手会員からのメッセージ

加藤亜記：藻類とこれまでの 10 年，これからの 10 年

今年で日本藻類学会が設立されて 60 周年ということは、人であれば還暦で、生まれた年の干支に戻る再始動の年になるかと思えます。自分にとっても、ちょうど、研究者として世に出てから約 10 年でもあります。そこで、自身のこれまでを振り返りつつ、今後の研究や教育活動と藻類学への寄与について考えてみました。

前回の 50 周年に際して、先輩諸氏が和文誌「藻類」に寄せた記事を読んだのは、大学院の博士課程の 3 年生のときでした。当時は、それから 10 年たって自分が記事を書くとは予想もしなかったのですが、どうにか藻類の研究に貢献してこられたことは幸せだったと思います。自分のこの 10 年は、博士号取得から約 8 年間の博士研究員（以下ポスドク）生活を経て、大学の任期付き教員になるという、比較的動きのある年月でした。おそらく自分と同世代の学会員は、1990 年代の大学院重点化と、それによって増加した博士号取得者の受け皿として実施された文科省の「ポスドク一人支援計画」によって、任期付きの研究職を経験していることがほとんどだと思います。

私のポスドク生活は、北海道大学、神戸大学、琉球大学と文字通り北海道から沖縄まで日本列島を縦断するものになりました。この間、海藻類、微細藻類、サンゴ礁生態の研究室に籍を置き、それぞれ異なる生物を対象にした系統分類や生理生態学的な研究に参画できました。幸いどの研究室でも、多くの貴重な経験を積ませてもらったことには大変感謝しています。中でも思い出深いのは、琉球大学で研究した約 4 年間で、研究対象や分野は違っても、サンゴ礁島嶼域での研究を盛り上げていこうという志を持った同世代の仲間にも恵まれたことです。自分の専門とする海藻にも分類学にもなじみの少ない研究者の中で、日々の研究や自主的に立ち上げたセミナーでのディスカッション、他愛のない雑談を通して、今一度、どうして海藻を研究対象にしているのか、どうして分類学なのか、を考え続けました。

2011 年の 2 月に、海藻類の研究室が絶えて久しい広島大学に就職し、瀬戸内海の多島美が臨める水産実験所で教員生活をスタートさせました。大学にも実験所にも海藻類の基礎的な知見の蓄積がほとんどなかったため、まずは、学生の卒業研究として、実験所近辺の海藻相と季節的消長の研究を始め、受け持った講義や実習では、海藻類の基本的な分類や生態、気候変動との関連などをかいつまんで紹介しています。また、実験所からほど近い大崎上島の「磯の観察会」では、参加者に向けて海藻の解説をしています。教える側になってから、一般の人やそれと変わらない学生に向けて、藻類の研究を通して伝えるべきことは何だろうか、と考えるようになりました。

今のところ、先に述べたような、自分の研究や教育に対する



問いには、まだ十分な答えを出せていません。ですが、自分が藻類に関わっていた理由は、複雑な進化系統や分類はもちろん、環境と人の健康の両方を支え、様々な分野の学問と関連していることが純粋に面白いこと、そして、分類学をベースに、「新しい研究の基礎をつくる」ため、藻類の分類群の由来や性質が有機的に他分野に繋がるような研究を目指したいからです。

教育に関しては、今は、そのベースを作るために、藻類の生物としての特殊性と普遍性、基礎的研究と応用的研究について、広く勉強して面白さを見つけ、研究を深めるときなのかもしれません。学生実習のため、瀬戸内海のカキやノリ養殖施設の見学に行ったことで、これまであまり知らなかった水産学における藻類の役割や生育環境についても、もっと知りたいと思うようになりました。しばらくは、自分の専門の系統分類の研究を継続しつつ、目の前に巨大な水槽を持っているとも言える水産実験所にいることを生かした研究や教育を試行していく予定です。

最後に、日本藻類学会について思うことは、「藻類」をキーワードに、それぞれ多様な研究をしている学会員が集まっても、緩やかに繋がっていられるような横の連携がないことです。とくに、若い世代は、「自分は何ものなのか」、「自分は何ものでありたいのか」を模索している直中にあると思います。誰でも所属や分野を越えて、自由かつ広く交流して、議論が出来るような場を作り、盛り上げていくことが、この学会を支える次の世代を育成する鍵になるはずです。少なくとも、それが実行できる潜在力は既に学会の中にあると信じます。

(広島大学大学院生物圏科学研究科附属水産実験所)